魔法少女リリカルディケイド

273

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界の破壊者として恐れられていた神北裕輝

しかし何者かの手により全ての記憶を失った

この物語はそんな主人公、神北裕輝がリリカルなのはの世界を救い、自分の記憶を取り戻すために日々奮闘する物語である

※物語の中盤までは、日常パートがメインで話があまり進みません

※時々に意味不明な言動が飛び出します

それでも構わんと思う人は暇つぶし程度でもいいので見てください

目次

0話 …… 1
無印編
プロローグ …… 6
#1 …… 12
#2 …… 18

0話

「ここは？」
気がつくと女性は見知らぬ場所に立っていた
辺りを見回すとそこは高山地帯と思われるところだった
「どうしてこんなところに？」
女性が動こうとしたその時だった
ズドォーーーーーーン!!？!!？!!？!!？!!？!!？!!？
「嫌ぁぁぁ!!？」
1発のミサイルが飛来し、彼女の近くに着弾した
彼女が顔を上げると同時に1台のバイクがけたましい音を立てて彼女の傍を横切った。バイクが走り去った後に1台また1台続いて走り去っていった。
よく見ると格好が変だった。
男達？（中には一部女性もいた）の姿は戦闘スーツを身に付け、腰にベルトを巻いた戦士と呼べる者達であった。そして頭部に位置するマスクも独特な物だった。カブトムシがモチーフと思われる者もいればクワガタやバッタ等の昆虫を模した者もいた。

さらにマスクが伝説の生物である龍を模した戦士や桃の形をした者、鬼のようなマスクをした戦士もいた。
彼等はある方向に向かっていた
遠くからではよく見えないが彼等が向かっていた方向には同じく戦闘スーツを身に付けて、腰にベルトを巻いた戦士が立っていた。
遠く離れていても彼の得体の知れない何かを女性は感じた。
「・・・・」
そして彼女の上空からは電車や巨大な城とドラゴンが合体した兵器や紅い龍、漆黒の色をした龍が彼のいた場所に向かって攻撃を放った
彼は臆するどころか巨大兵器に向かっていき、腕に力を溜めてビームのような攻撃を放った。そのビームはたった1発当たっただけで電車やドラゴンを破壊した。
「・・・」
彼は何事もなかったように向かってくる戦士達の方へ顔を向けた。
そして向かってくる戦士にパンチやキックを叩き込み続けた
その光景は圧巻の一言に尽きた。
たった一人を倒す為にこれだけの大部隊が集結し、その一人を倒そうと向かっていったのはいい。

しかし現実は残酷だった。電車や質量兵器、伝説のドラゴンを以ってしても彼にダメージを負わせるどころか傷一つつけることができなかった。
そして彼自身が向かってくる戦士や兵器をあざ笑うかのように、全てを破壊し尽くした。

そして気がつくと戦いは終わっていた。
彼女の周りには動かない戦士達が何人も倒れていた

そして彼女が正面の人物を目に写した

中央に紅い宝玉が付いたベルト、黒と白さらにマゼンタを基調したスーツに胸に１０
それかXを表す線、そして緑の複眼をした戦士が彼女の前に現れた。
彼は全身に光を纏いながら彼女を見つめていた、その姿は神々しく感じた。
彼女は一瞬戸惑ったがすぐに冷静になり、戦士の方を見つめた
初めて会ったのに、そんな感じはしなかった。彼とは何回も会っている感じがしたからだ。

そして彼女に向かってゆっくり歩いて来た。
しかし彼女は恐怖しなかった、あれだけ破壊した人物が自分に向かって来ているのに
そんな感じはしなかった
しかし彼女は戦士の名前を知っていた。初めて会ったのにだ。
彼女は自分に向かって来る戦士の名前をつぶやいた。
「ディケイド」と

無印編
プロローグ

「ここは？」
　俺が目を覚ますと眼前に映ったのは真っ白で何もない空間だった。
「あら、気が付いたのね」
　後ろを向くとオレンジ色のロングヘアーの女性がいた。
「あんたは？」
「私はレイ、貴方の世界で言うと神様かしら」
「か、神様⁉？」
「なによ、信じてない顔ね」
「そりゃそうだろ、神様なんて普通居るかどうかも怪しいのに」
「現に私は神よ、今は事情があってここに居るんだけどね」
　しかし、神様っていうより、独身で仕事ができるＯＬみたいな感じだな。
「なんですって、・・・・・い、今なんて言ったのかしら」
「あ、あれ、今口に出してた？」

そんな馬鹿な、ちゃんと心のなかで言ったはずだ。
「私にはね聞こえるのよ、貴方の心の声が」
「頭に来たわ、貴方、踏み台転生者になりなさい」
「は？なにそれ」
踏み台？聞いたことない単語だな
「踏み台って言うのは、女の子に俺の嫁って言って困らせて、その世界のオリジナル主人公にボッコボコにされる役ね」
「ふざけんな、なんで俺がそんな役やらなければならん、お断りだ」
「貴方に拒否権は無いわ、今私が決めたの」
「断る、貴様の指図など受けん‼？」
「貴方が行く世界はリリカルなのはの世界ね」
「話聞けよ」
「転生特典は、王の財宝とサーヴァント並の身体能力、一生遊んで暮らせるお金なんだけど、何か要望はあるかしら？」
「そこは普通に聞くんだ」
「何よ、文句があるなら一応聞いてあげるけど」
「いや無いけどさ」

「で、いるの？ いらないの？」
「じゃあ保留でいいよ」
「それじゃあ転生させるわ、転生完了したら自分の仕事をきちんとすること、いいわね」
「はいはい、わかったから、口煩せー母親かっての」
　ピッ
「じゃあ逝って来なさい」
「あれ、行くの字が違って聞こえたような」
　ガコン
「えっ」
「嘘ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーン⁉？」

　行ったわね
　あの方はまだあの世界に裕輝が行ったことを知らないはず、あの子が記憶を取り戻すまでは知られるわけにはいかない

私も貴方の記憶が戻るように最大限力を貸すわ
だからお願い、世界をあの方から救うために戦って
そう言ってレイは両手を合わせ、神北裕輝に祈りを捧げた

あれ、何処だここ？
見渡すとそこは見知らぬ部屋だった。テーブルの上に手紙が置いてあったのでそれを広げて見ると
「ちゃんと転生できたようね、安心したわ。
一応説明しておくと、貴方の家族は一応海外に出張してる設定よ。それと生活に必要な物は全て私のほうで用意したわ。何か必要な物があったら私に言って頂戴、すぐに用意するわ。銀行の口座にある金額は〇〇〇〇〇〇円よ、無くなりそうだったら事前に連

絡すること。無駄遣いは駄目よ。
それじゃあ頑張って頂戴、いい結果を期待してるわ」
お姑さんですか貴方は？
て言うか、口座にある０が数え切れないほどあるんだが間違いじゃないよな。そもそも俺、ちゃんと魔法つかえんのか？使い方なんて知らねーぞ。
あいつ、要点だけまとめてすぐに転生させやがって。
その踏み台ってやつをちゃんと説明してから送れよな
「ん？なんだこれ？」
そこには『踏み台に関する説明書』と書かれた薄い本が置かれていた。
「なになに？」
「踏み台とは女の子全員に俺の嫁と言い、困らせて反感を買って、その世界の主人公やオリ主からフルボッコされることを・・・指すだと」
「・・・・・」
「ふっざけんなやーーーーーーーーーーーー!!」
なにそれ!?？嫁って言っただけで俺ブッ殺されんの？
どんだけ理不尽な世界なんだよここは
あいつが魔法の世界とか言ってたけど、魔法じゃなくて暴力の世界の間違いなんじゃ

ねーの。そんな物騒な世界なら外に出たくないんだけど

なーんか面倒くせーからやめっかな。そもそもなんで好きでもねー奴にそんな事言わなくちゃいけねーんだよ。なんか俺にメリットがあんのか、デメリットな未来しか思えねーんだけど。

面倒ごとは避けたいしな。話し掛けられても最低限の対応すればいいだけだし。

つーか俺ってこんな色の髪だったっけ？前黒髪だったのに銀髪になってるんですけど。目の色も茶色じゃなくて赤目になってるし

ま、いいか。この世界見た目じゃなくてどれだけたたかえるかだよな

あー、そろそろ腹減って来たし飯にするかな。バビロンの練習は後ですればなんとかなるかな。

とりあえず考えんのは後、まずは飯からだ

＃1

俺こと神北裕輝がリリカルなのはの世界に転生して9年が経った。今のところ何の問題も無く生きていけてる。ここの生活にも慣れて来たからな。

6歳くらいまではレイと生活していたんだが、3年前から連絡が一切なくて今は俺1人で生活している。最初は疑問だったけど、あいつも一応神様だから仕事が忙しくて来れないんだろうと思って気にしなくなった。

しかし問題は明日だ。明日から俺は原作キャラの通っている私立聖祥学園に行かなければならない。聞くところによるとここの学校は5年前に共学になったらしい。だがそんなことどうでもいい。

俺が心配してるのは、原作キャラに会ったらどんな態度で接していけばいいかだ。無視するわけにもいかないし、かと言って俺が近付き過ぎて面倒事に巻き込まれる可能性も高いからな。

そう言えば、あのレイって神様が俺以外にもう1人転生者がいるって言ってたな。俺より少し前に転生して来た奴らしい。

名前は確か篠宮アキトだったか?まあいいや、行けば分かることだしな。あー学校とか怠いわーー。

ーーーーーーーーー

ーーーーーーーー

ーーーーーー

ーーーーー

ーーーー

ーー

ー

来てしまったＺＥ!!?･この日が。ちなみに俺の家から聖祥学園は7分ぐらいで着く距離にある。この学校の生徒のほとんどがバスで送迎して登校してるらしいな。まあ俺には関係ねーけどな。

おっと、そう言えば職員室に行って挨拶しなくちゃいけないんだっけ、気合いを入れねーとな、目上の人には敬意を払うのが基本だからな。

俺は息を整えて目の前の扉を2回ノックをして、ドアノブに手を掛けて扉を開け、完全に閉め切ったことを確認して、職員室の先生方を見て全体に聞こえるようにしてお約

束の一言を言った。

「失礼します」と言ってから「今日から3年間通うことになった神北裕輝です。よろしくお願いします」と大きな声で自己紹介をしてやったぜ。

「3年1組の担任の先生に用があって来たんですけど、どなたですか？」そう言った時に立ち上がってこっちに近づいて来た先生がいた

「いい声をしてるね。礼儀正しい子で安心したよ」

「あなたは？」

「私は霧島柚月って言うんだ。宜しくね神北君」

ぱっと見た印象は、クールな女性だな。身長も高くスタイルもモデル並に整っている。一言でまとめるなら完璧だな。

まああの神様も美人なのは間違いなかったが、人を小馬鹿にする態度や上から目線の言動がな、減点かな。

「早速だけどＨＲが始まる時間だから紹介はＨＲが終わった後でいいかな」「いいですよ、教室に着くまで先生と少しお話したいですし」

「おや、気が合うじゃないか。私も君と話したいと思っていてね、それじゃあ教室まで案内するよ。ついておいで」

「はい！、それでは失礼しました」

俺は今霧島先生と並んで廊下を歩いている。そして霧島先生と少しだけ雑談していると、目的の教室に着いてしまった。今の気分は正直いって最悪に近いが霧島先生と話して気分が和らいだからいいとしよう。

「では少しここで待っていてくれ、名前を呼んだらでで来てくれ」

「はい、わかりました」

そうして霧島先生が教室に入っていくと、騒がしかった教室が一気に静まり返った。え、何この人。入った瞬間静かになるってどんだけ凄い人なんだ？先生入った瞬間子供達が一気に席に着いたんだけど。

「席に着いたね、みんなおはよう」

「おはようございます、霧島先生‼？」

余程信頼されてるんだな、この先生。確かに俺も初対面の時すごい威厳を感じたからな

「今日のＨＲの内容は以上、何か質問はあるかな」

「ありません、先生‼？」

「よし、では今日からクラスメイトになる転校生を紹介しよう。入ってくれ」「はい！」ガラッ

その瞬間、教室が一気に騒がしくなった。

「え、女の子？」「綺麗な銀髪だね」「男の娘キターーーー‼？」などという声が聞こえて来たが無視する。つーか女の子って言った奴誰だ☒

確かに俺の容姿は自分で言うのもあれだが、美系ではなく女の子だ

この顔のせいでレイに抱きつかれたり、抱っこされたことも数え切れないくらいやられた

この顔も悪くねーんだがもうちょっといい顔なかったのか？って今でも思ってるんだよ俺は‼？

「はいはい、静かにしなさい‼？、じゃあ神北君、自己紹介をお願いね」

「今日から転校して来た神北裕輝だ。そうだなぁ、趣味は料理と読書それからトレーニングだ。勉強はそこそこできるから分からないことがあったら、聞きにきてくれ。まあ3年間の付き合いだけど宜しくな」

「これから宜しくね神北君」「よろしくー‼？」

と歓迎されたのはいいんだが睨んできた奴が2人いた。おそらく1人は原作キャラだが、もう1人の方は転生者って奴だな。つーか小3であんな眼力できんだ。半端ねーな小学生って奴は。

「ああ、ちなみに俺は男だからそこんとこ間違えないように」

　そう言うと教室が一斉に静まり返り
「えぇーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
という奇声が響き渡った。つーかうるせーーーんだけど。耳の鼓膜が破れんじゃねーかってぐらいの音量だったな。あー痛ぇ、ズキズキすんだけど。

　まあいいやこっから俺の楽しい?学校生活が始まんだからな。楽しむとしますか。

＃2

キーンコーンカーンコーン

「もうお昼ね、それじゃあ4時間目の授業はここまで。次の5時間目の授業は体育だからしっかり昼食を摂って臨むように、以上」

「起立!!?.礼!!?.ありがとうございました!!?」

この学校に来てから1週間が経ったな。授業の内容は解りやすいし、担任の霧島先生は超絶美人だし隣の席は月村さんだし超いい事づくめだな。俺その内不幸な事に巻き込まれるんじゃね、割とガチな方で。

え、初日に言った無視するとか最低限の対応はどうしたのかって?

いやしようと思ったんだけどさ、先生に「じゃあ神北君の席は月村さんの隣でいいかな?」って言われて、空いてる席の隣を見た瞬間にそんな考えが吹っ飛んだんだよ。紫色のロングヘアーに白いヘアバンドを着けていた美少女がいたからだ。席に着席して横を向いたときに

「えっと、月村すずかです。よろしくお願いします。何か分からないことがあったら何でも聞いてください。」ニコッ

「⁉?⁉?⁉?う、うん。お、俺は神北裕輝です。よ、よろしくお願いします」みたいな感じになって、それからなんだよ。

月村さんにお世話されまくってるわけですよこれが。お前らにこの気持　ちがわかるか？美少女に手取り足取り教えてもらうこの気持ちが

初日の日に学校を案内しれくれたり、授業で使う本や道具を運ぶ時にも手伝ってくれたりしてくれたんだよ彼女は‼?しかも嫌な顔一つもせずに

「大丈夫だよ気にしないで、私が好きでやってるんだけだから」

って言ってくるんだよあの子は。

どんだけいい子なの、お兄さん君の将来が心配でしょうがないよ。

もし悪い虫ケラが言い寄ってきても大丈夫。俺が速攻で排除してあげるからね（社会的に）

そんなこんなで回想していた訳だが、突然声をかけられた。

「少しいいか」

「確か篠宮君だったな。俺になにか用か？」

「ここじゃ話しづらい、場所を変えないか」
「ＯＫ。じゃあ屋上にしようぜ。あそこならちょうどいいだろ。」
「ああ、俺もそこで構わない」
「じゃあ行こうぜ」
「ああ」
そう言いながら俺と篠宮君は屋上に行くため鞄を持って教室から出て行った。あんまり彼と話したことが無かったから緊張しちゃったな。しかし、イケメンってのは何をしてもイケメンなんだな。話してるときも女子から熱い視線を貰ってたぞ。

「そんじゃ、いただきます」
両手を合わせ、日本人なら大抵言うであろう恒例の言葉を口にして、ミートボールに箸を入れた。
「う～ん。美味!!?。さすがは俺ってとこだな」
そうして食べ終わる頃に不意に篠宮君が話しかけて来た。
「そろそろいいか?」
「ちょっとまってくれい、これ食い終わったらな」

最後にとっておいたハンバーグを呑み込みストレートティーを口に流し込み、両手を合わせて
「ごちそうさま」
弁当箱を仕舞い、俺は篠宮君と話せる状態を作った。
「飯も食い終わったことだし、そろそろ俺達のことについて話そうか」
「ああ、そうだな」
篠宮君は手に持っていたコーヒーを置いて、正面にいる俺を見て、少し間を空けてから口を開いた。
「当然のことを聞くが、お前は転生者なんだろ」
「まあね、成り行きでなったって感じかな」
別に間違ってない。
理由もわからないで死に、あいつに無理矢理転生させられて、踏み台とか言う訳わからん役押し付けられるわで最悪だったな。
「お前のことは神様から聞いてる。踏み台らしいな」
「確かにあいつから言われた役は踏み台だけど、それが？」
「俺は、お前が女子に嫌な思いをする行動をした時に処置を下す予定だったが、お前は今のところそんな事はしていない、なぜだ」

「なんでって言われてもな」
「そもそも好きでもない子に、なんで嫁って言わなきゃいけないんだ？」
「なんで疑問形で返す。質問を質問で返すな」
「んなこと言ったってな、面倒くせーって思ったからだな」
「面倒？それだけか」
「そう、この世界に来てすぐに決めたんだ。踏み台やって他の奴らに嫌われたりするのは嫌だからな」
「じゃあお前は神様の命令には従わないということか？」
「そういうこと。あいつの言うことを聞くのは癪だからな」
「もし、あの人がこっちの世界に来たらどうする」
「それはないな」
「なぜそう言い切れる」
「先週連絡来た時にもう踏み台はやってないって言ったらなにも言ってこなかったし、それにあいつ前々からこの世界にきてるぞ、主に俺の家だけだがな」
「あの人がこっちの世界に来てたのか⁉？」
「ああ、俺が転生してきた時から、こっちの世界に来てるぞ」
「なるほどな、ならお前はもう踏み台としての活動はしないと言うことでいいんだな」

「そういうことにしといてくれ、1人は寂しいからな」
「お前のことはわかった、疑って悪かった」
そう言いながら篠宮君は頭を下げて謝罪して来た。そんなことしなくていいのに。
もしかしたら真面目キャラなのか？
「頭を上げてくれよ篠宮君」
「だが証拠もなしに疑ったのは俺だ、だから謝らせてくれ」
「そんなことよりさ、ジュエルシード集めに俺もいれてくれないかな」
「どうしてジュエルシードのことを知ってるんだ？」
「あいつからこの世界の重要な物だって聞いてね」
「だが、お前は戦えるのか？」
「うーん、王の財宝貰ったから大丈夫なんじゃないかな」
「やっぱりダメだ、俺はお前を巻き込みたくない」
「頼むよ、俺もこの世界を救いたいんだ。嫌われる役じゃなくて危険なことから全ての人を守れる正義の味方になりたいんだ」
そうだ、俺は踏み台なんかじゃない。
この世界の人々全てを救う為に今まで生きてきた。
この想いは今も昔も変わらない。

「わかった、だが無理だと判断した時は」
「わかってるよ、そん時は潔く戦いから身を引くよ」
　その時、篠宮君が右手を差し出して来た。
「何がともあれ、これから宜しく頼む神北」
「違う違う、裕輝でいいよ篠宮君」
「なら俺のこともアキトでいい、裕輝」
「ああ、よろしくなアキト」
　俺達はがっちり握手を交わした。
　これからは一緒に戦う仲間だからな。
「そう言えば気になったことがあるんだが」
「なんだよ」
「神様と暮らしてるって言ってたが、裕輝のご両親はいないのか？」
「・・・」
「どうしたんだ？」
「俺、記憶がないんだ」
「!!？!!？!!？記憶が・・・ない」
「ああ、前の世界でも1人暮らしだったんだ」

「俺自身、どこで生まれたのか、それすら分からないんだ」
「・・・すまない・・・そんなことも知らずに」
「謝んなよ、アキトが悪いわけじゃない、未だに家族の顔1つ思い出せない俺が悪いんだ」
「・・・だが」
「でもなこれだけはいつも肌身離さず持ってたんだ」
そう言うと裕輝は懐から一枚の写真を取り出した
その写真に写っていたのは裕輝の両親、そして、裕輝と仲良く手を繋いでいた少女が写っていた
「これが裕輝の家族の写真」
「かどうかもわかんないんだけどな、本当にその写真に写っている人たちが俺の家族なのか」
「いつも思ってるんだ、その人たちを探すのが俺のやるべきことなんじゃないかって」
「裕輝」
「心配すんな、俺も覚悟を決めた以上お前たちと一緒に戦う。記憶を取り戻すのはその後でも遅くないからな」
「さあ、こんな暗い話はこれでおしまいだ。今はやならきゃいけないことがたくさんあ

るからな」
「ああ、そうだったな」
ーーーーー
ーーー
ーー
ー
「そういえばジュエルシードは何個集めたんだ？」
「今のところは５個回収した」
「なるほどな、じゃあ残りの石もこの町のどこかにあるってことだな」
「ああ、そのことなんだが、なのはは知ってるか？」
「ああ、高町さんだろ」
「一緒にジュエルシードを集めてる仲間なんだ、でも今日は用事があって、すぐに帰らなきゃいけないんだ、来週の土曜日でよかったら翠屋に来てくれ、なのはのことも紹介したい」
「全然ＯＫだよ、これから一緒に戦う仲間だしな」
「決まりだな、来週の１０時くらいに翠屋に集合だが場所はわかるか？」
「俺の家から結構近いから大丈夫だ」

キーンコーンカーンコーン
「もう5分前か、結構話したな」
「ああ、早く行かねーと霧島先生のお説教が始まっちまう」
「それだけは勘弁だな」
そんなことを話しながら教室に戻る途中で鉄人に見つかり、1時間近く俺とアキトは追い回された。あの人人間じゃないよね。
サーヴァント並の身体能力持ってんのに追いついてくるってどういうことやねん。サイヤ人か何かなのか？
ちなみにアキトは速攻で捕まった。ホントは助けに行きたかったけど鉄人の奴がもの凄いスピードで追いかけて来たから急いでその場を離れた。
教室に戻って入るなり俺達2人は霧島先生のお説教をくらった。
説教されてる時、みんなから哀れみの視線を受け続けた。
全く、今日は厄日だな。
まあ来週が楽しみだな